

山本周五郎、 長生橋を渡る？

佐藤 正 二

(『長岡★堀口大學を語る会』代表)

私が堀口大學と西脇順三郎の交遊関係に興味を持ち、二人を調べ始めたのは実はほんの七、八年前からのこと。それまでは「井伏鱒二命、彼の書いたものなら小説であれ随筆であれ中学生のころから蒐めては、矯めつすがめつ手にとつて、われこそ日本一のファンだと自惚れていた（もちろん今だってそうだが）。

ところが定年退職後、暇つぶしにと思つて山本周五郎を読み始めた。これが面白い。肩のこらない戦前の講談系短篇から、戦後円熟期の「樅ノ木は残った」や「赤ひげ診療譚」など長編の数々まで、新潮文庫を一冊買つては読み、また一冊買つては読み読みしているうちに、いつの間にか書棚に三十冊を優に超えるほど並ぶようになった。周五郎は生前六百篇にも及ぶ小説を書いたというから、それに比べればまだ半分を少々超えた程度なのだが、それでも随分親しんできたとは思ふ。

さて、あるとき一篇の短編を読んでいて、私はなんだか妙な気分になってきた。小説の面白さもさることながら、そこにはどこか見覚えのある情景がやたら出てくるのだ。「五月雨に水嵩の増した信濃川はおどろおどろしいとしか見えない」とか、「一

(江戸から国元に着いてみると、家は) 御城の北側にあり…、西願寺の鐘が聞こえ…、王蔵院…」とあったりして、この小説がどうやらわが長岡藩を舞台にしているらしいことにやがて気づいた。西願寺は呉服町に現存する寺だし、王蔵院だって観光院と並んでかつて長岡にあった町名である。

長岡とはどこにも書いてないのに、これは一体どうしたことか？ そんな疑問から出発してその後、ほぼ一年間この短編と周五郎の周辺を調べ進めていくうちに、これが実はあの菊池寛との確執の中から生まれ、そして山本五十六元帥への密かなオマージュとして書かれた小説だということが判ってきた。ここでの詳細な論考は省くが、主人公の父保持忠太夫は長岡藩「寛永分限帳」の「江戸衆寄合組」にある実在の保地九郎右衛門がモデルだし、時代も「大浄院さまの御治世はじめ…」とあって、三代藩主牧野忠辰ころというふう設定されていて、このほかにも長岡に関わる表現があちらこちらに出てくる。

そんなわけで周五郎が長岡のことを綿密に調べたうえで、この短編を書いたのは間違いないと結論づけ、数年前、『桃の井戸』のなぞ―山本周五郎と長岡との関わり―』として百枚近くに纏め上げた。周五郎と長岡を結ぶ接点は幾つかあったし、いや、ひよっとして彼が長生橋を渡ったことさえあったかもしれないと、今では思うようになった。歴史も小説も、ちょっとしたところから面白く、深い世界が広がっていくものである。小説の名は「桃の井戸」。『日本婦道記』の中にある短篇である。

